



TITLE:

彙報：一九八三年六月より一九八四年五月まで

AUTHOR(S):

---

CITATION:

彙報：一九八三年六月より一九八四年五月まで. 東方學報 1985, 57: 743-753

ISSUE DATE:

1985-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66636>

RIGHT:

# 彙報

一九八三年六月より  
一九八四年五月まで

## 研究状況

### 班研究

### 東 方 部

中國文明の諸原流

班長 林 巳奈夫

研究發表と『睡虎地秦墓竹簡』の會讀とを交互に行っているが、『睡虎地秦墓竹簡』は一九八四年四月をもって讀了した。

研究發表の題目は次のとおり。

六月一〇日 周原建築基址の解釋 田中 淡  
六月二四日 夏の傳説と二里頭文化 淺原 達郎

七月八日 頌漢思想について——洛陽への道 北村 良和

九月一六日 所謂饗養紋は何を表はしたか 林 巳奈夫

九月三〇日 陝西岐山鳳雛出土の甲骨について 淺原 達郎

一〇月一四日 秦裁判制度の復原 初山 明

一〇月二八日 最近の中國古代城址について 杉本 憲司

十一月二五日 蘇禹神話の整理 小南 一郎

十二月九日 戰國秦の家族と交換經濟 稻葉 一郎

彙報

一月二〇日 聯坐制とその周邊 富谷 至  
二月三日 最近の西周金文曆譜研究 淺原 達郎

二月二七日 秦始皇陵と兵馬俑坑 曾布川 寛  
四月二七日 寶雞茹家莊竹園溝の西周墓と巴蜀文化 淺原 達郎

五月一日 中國東南部の、印紋陶、をめぐる文化 平田 昌司

五月一八日 周の長子相續制について 北村 良和

五月二五日 中國東北方地方の先史土器 宮本 一夫

『睡虎地秦墓竹簡』は、法律答問を初山、封診式を佐原、爲吏之道を松井がそれぞれ擔當した。なお、當班で發表されたものをまとめ、『古史春秋』と題して逐次刊行することとした。

石刻資料の研究・整理 班長 梅原 郁

一九八三年四月より開始した本研究班は、これまで研究所が蒐集してきた金石拓本の研究と整理を目的としている。さしあたって、金石拓本に關する班員共通の知識ベースをつくるため、『金石萃編』等の既存の金石關係の書物に収録され、また當研究所にその拓本が所藏されているものを中心に、その紹介と拓本との照合、問題點の検討を行なう。

一九八三年

六月 七日 石門頌 富谷 至

六月一四日 文津閣記と文溯閣記 井波 陵一

六月二二日 邵陽令曹全碑 赤松 紀彦

六月二八日 吳の天發神讖碑・禪國碑と魏の受禪碑・上尊號碑・孔子廟碑 勝村 哲也

七月 五日 宋太祖被弑説と上清太平宮 愛宕 元

一〇月一一日 書錦堂記と表忠觀碑 梅原 郁

一〇月一八日 京博所藏のいわゆる汝帖について 福本 雅一

一〇月二五日 元孫真人道行碑 杉山 正明

十一月八日 陳思王曹植碑 井波 陵一

十一月一五日 漢孔廟置百石卒史碑 富谷 至

十一月二二日 龍門藥方洞の所謂阪齊古驗方碑について 勝村 哲也

一九八四年  
一月二九日 大唐中興頌殘 愛宕 元

一月二四日 慈恩寺聖教序 秋山 元秀

二月 七日 大秦景教流行中國碑 磯波 護

二月二二日 漢張遷碑 福本 雅一

四月二四日 訪中報告 梅原 郁

五月一五日 大觀聖作碑 梅原 郁

五月二二日 元張留孫碑 杉山 正明

五月二九日 司隸校尉魯峻碑 富谷 至

中國古代の科學 班長 山田 慶兒

わが研究班はさきに「新發現科學史資料の研究」(七七七八一年度)をおこない、既存の資料を用いて新出土資料を検討した。今回の共同研究(期間は八二年度から五年間)は、その成果のうち

えに立ち、研究のベクトルの方向を逆にして、新出土資料を用いて既存の資料を再検討しようとするものである。

新出土資料の多い醫學の分野では『黃帝內經』、天文學の分野では『開元占經』などをテキストとしてとりあげ、漢代を中心に、古代科學全般について、再検討を進める計畫である。また、その間各班員の研究報告をもあわせおこなってゆく。成果は逐次『東方學報』に發表してゆく豫定である。標記の期間に行なわれた研究發表は次の通りである。

- 一九八三年度
  - 六月二八日 道教の旅から(スライド併映) 小南 一郎
  - 六月二八日 もう一つの易筮法 川原 秀城
  - 七月 五日 『黃帝內經』の陰陽五行説 林 克
  - 七月二二日 彭祖傳説と『彭祖經』 坂出 祥伸
  - 九月二七日 中國古代城市制度研究之一 湖生
  - 一〇月二五日 中國醫學史における『難經』の意義について Paul Utschuld
  - 十一月二五日 中國旅行報告 山田 慶兒
  - 二月七日 中國物候學と歴史資料内の品目同定 森村 謙一
  - 二月七日 張湛『養生要集』の復原とその養生思想 坂出 祥伸
  - 二月一四日 治法をめぐる問題 赤堀 昭
  - 二月二二日 漢式盤の研究について Marc Kainowski

- 二月二日 京都の鍼灸 高島 文一
- 三月 六日 先秦時代建築の新資料 田中 淡
- 三月二七日 中國聲律小史 川原 秀城
- 三月二七日 湯液試論 山田 慶兒
- 一九八四年度
  - 五月二二日 『黃帝內經』九鍼篇の古層の復原 勝村 哲也
  - 五月二二日 『黃帝內經』九鍼篇の古層の復原 山田 慶兒
  - 五月二九日 出土醫療器具 櫻井 謙介
  - 李義山七律注釋 班長 荒井 健
  - 一九八一年度から三年間、晚唐文學班および李商隱研究班における成果をふまえ、晚唐の詩人李義山即ち李商隱の作品中、最も重要かつ難解な七律に對象をしぼり、入手可能なかぎりの各種テキストを参照しつつ、校訂注釋の作業を進めてきた本班は、七律の全篇一二四首および關聯作品三〇首計一五四首を読みおえ、八四年三月に研究終了。その成果は『東方學報』に「李義山七絶集釋稿」(一)および「李義山七律集釋稿」(一)として發表、殘餘の部分も逐次同學報に掲載する。
  - 江南文人の研究 班長 荒井 健
  - 一九八四・八五の兩年度にわたり、江蘇・浙江・安徽を中心とする地域における舊中國の知識人の文化的生活ないしは藝術的生活について、特定の王朝・時代等に限定せず、こうした時間的・空間的に膨大な研究對象に、いかに取り組むかの方法論を主として探って行く。
  - 明代の政治と社會 班長 小野 和子
  - 一九八三年後半は「皇明經世文編」に収録され

- た文章のうち、班員夫々が關心をもつテーマを選択し、會讀を中心に研究會を進めた。この間、及び八四年に入ってからの研究會における報告テーマは以下の如くである。
- 一九八三年度
  - 一月八日 中國國內的清史研究的狀況和今後的發展 戴 逸
  - 一月一五日 明代宗教反亂小論 大澤 顯浩
  - 一月二二日 明代の典禮問題と政治思想 鄭 臺燮
  - 一月二四日 隆慶和議と小西商人 小野 和子
  - 一月三一日 清代臺灣の水利事業と一田兩主制の形成過程 松田 吉郎
  - 二月七日 清代山東の市集と紳士層 山根 幸夫
  - 二月一四日 訪中報告 森 正夫
  - 一九八四年度
    - 四月二四日 清代思想史からみた鏡花縁 小野 和子
    - 五月八日 張瑞圖 福本 雅一
    - 五月一五日 明代の家丁 岡野 昌子
    - 五月二二日 東陽の民變と南明の抵抗運動 谷口規矩夫
    - 五月二九日 明代ウリヤンハ三衛の出自 杉山 正明
- 目錄學の諸問題 班長 尾崎雄二郎
- 一九八三年六月以降の發表は以下の如くである。
- 六月二〇日 叢書の分類について 井波 陵一
- 一〇月二四日 杜牧の詩風について 愛甲 弘志
- 一月七日 『古今韻會舉要』に引く『説文

解字』について 中前 千里  
一月二日 鄭玄『毛詩譜』について

二月五日 元史卷一百七宗室世系表について 杉山 正明  
一九八四年四月より黄丕烈の『士禮居藏書題跋記』の解讀を始めた。

五月七日 周禮より禮記鄭注まで 尾崎雄二郎  
五月二日 大戴禮記より汗簡まで

現代中國の社會と文化 班長 清水 茂  
現代中國の多角的な分析とその綜合をめざす本研究會としては、集團的勞作として「中國近代論争年表」編纂を中心にして、研究會をつみかさねた。一九八三年六月より八四年五月までの研究會の狀況はつきのとおりである。

一九八三年度  
六月一日 論争年表の項目について 川井 悟・北村稔・河田第一  
六月二五日 公開研究會(一)新中國成立以後の文學の流れをふりかえる 竹内 實

(一) 現状分析・文學

阿頼耶順宏・楠原 俊代  
村田 裕子・吉田 富夫  
七月九日 論争年表の項目について 吉田 富夫

七月一六日 論争年表の項目について 山田敬三・萩野脩二・竹内 實  
小島朋友・陳 財昆  
九月九日 パリ第三大學教授・ルーマン氏を  
かこむ研究會

一〇月二日 論争年表打合せ  
十一月二日 同右  
十一月二六日 同右

十二月〇日 公開研究會 (一) 開放政策下の中國國際貿易 石田 錠二

(一) 黨の整風と精神汚染一掃のうごき 小島 朋之  
中島 勝住  
(二) 討論のまとめ

一月二八日 (一) 論争年表の項目について 述田 正雄 矢吹 晉  
一九八四年度 (二) 孫文と日本の志士たち 吳 豊邦

五月二六日 論争年表打合せ 全 員  
六月九日 同右  
六月二三日 神戸・孫文研究會、人文研・近代班と合同研究會(二)國民革命序論 北村 稔  
陳 徳仁  
(一) 鈴木久五郎と孫文  
(二) フランスと中國(スライド使用) 竹内 實

國民革命の研究

班長 狹間 直樹  
この一年間、さしあたり國民革命期を五四運動から抗日戦争までの十數年間と大雑把にとらえ、主として、班員各自が自分の研究テーマともっとも關聯のふかい分野を分擔して、當該時期のその分野の資料の整理紹介をおこなってきた。おおよそ、各分野について二回の報告でまとめよう計畫されているものが多いので、それらについては前編ということになる。特記すべきは、特別招聘教授として來所された中國人民大學教授戴逸先生の文獻選讀である。中國近代史上のトピックスに

ついて、五回にわたり、代表的な文獻をえらび、文章解釋から時代背景、資料整理狀況、研究狀況、問題點まで縦横に講義された。また、入浴された上海社會科學院歴史研究所研究員湯志鈞先生にも話していただいた。公開の講演會としては、十一月四日に戴逸先生の「第一次國共合作的醞釀」(通譯・森時彦)を、三月十一日に湯志鈞先生の「中國近代經學的特點」(文學部中國哲學史研究室と共催、通譯・岩井茂樹)をもった。此度、新しい研究會をはじめにあたり、發表擔當者が一週間前にレジュメを作成配布することを申しあわせたが、現在のところ勵行されていることを申しあわせたが、現在のところ勵行されている。討論の密度をこくする手段として有效なので、定着させてゆきたい。

一九八三年度  
六月三日 『新月』紹介 村田 裕子  
六月一〇日 『上海總商會月報』紹介 林原 文子  
六月一七日 中華西北協會と『西北』半月刊 片岡 一忠  
六月二四日 國民政府發行雑誌・年鑑・報告書について 川井 悟  
七月 一日 英國外交文書(F.O. 371文書)について 北村 稔  
七月 八日 章炳麟について Don Starr  
九月一六日 中國國民黨中央黨史史料編纂委員會と『建國月刊』 松本 英紀  
九月三〇日 第二次鴉片戦争關係文獻選讀(庚申戰輔紀變略) 戴 逸  
一〇月七日 王韜の國際意識と對外論の構造 西里 喜行

- 一〇月一四日 太平天國關係文獻選讀 (大朝田敬制度) 戴 逸
- 一〇月二日 吳佩孚について 松尾 洋一
- 一〇月二八日 洋務運動關係文獻選讀 (李鴻章「試辦織布局摺」) 戴 逸
- 十一月四日 甲申政變に至るまでの開化派および開化思想について 康 玲子
- 北洋艦隊について——駐日公使 何如璋と興亞會 徳岡 仁
- 十一月八日 戊戌變法關係文獻選讀 (「戊戌政變記」) 翁文恭公日記 戴 逸
- 十一月二五日 辛亥革命關係文獻選讀 (孫文「中華民國臨時大總統宣言書」) 戴 逸
- 十二月二日 民國初期の佛教雜誌について 竹内 弘行
- 十二月九日 國故整理、戴震、「四存月刊」 河田 悌一
- 一月二〇日 『新時代』紹介 濱田 直也
- 一月二七日 民國前期における教員の組織問題について 小林 善文
- 二月 三日 『五四運動の研究』第二函合評會 (森時彦論文、林原文子論文) 副島 圓照 片岡 一忠
- 二月一〇日 この一年間を顧りて——最近に讀んだ本など—— 全 員
- 三月 九日 史料の鑑別和整理 湯 志鈞 (通譯・森 時彦)

- 一九八四年度
- 五月二五日 訪佛報告 竹内 實
- 『五四運動の研究』第二函合評會 (川井悟論文) 黒田 明伸 班長 柳田 聖山
- 禪の文化 (第二期)
- 一九七九年四月に、五ヶ年計畫で發足した研究班は、宋代初期に書かれた禪宗史書の一つ、「禪林僧寶傳」三十卷の譯注をふまえて、廣く禪の歴史と文化の諸問題を考へて來た。五年間に本文二十卷を讀み終ると共に、班員による研究發表を、約十件ばかり行うことができた。本来ならば、成果公刊の時期であるが、班長柳田の在職期限もあり、このまま更に研究班を二ヶ年延長し、第二期としてテキスト全卷の譯注を、一先ず仕上げることとする。幸いに、今期は卷第二十一卷より九卷まで讀み終つたので、早急に殘る二卷の譯注をまとめるつもりである。又、今年二月を以て、柳田編「祖堂集索引」三册を、公刊完成することができた。班員の共力による、最大成果の一つである。
- 六朝・隋唐時代の道佛論争 班長 吉川 忠夫
- 一九八三年十月をもって、『廣弘明集』卷九に收める甄鸞「笑道論」の會讀をおわり、いちおうの譯注を作成した。以後あらたに同卷六・七の「列代王臣滯惑解」にうつり、一九八四年五月までに王度の條まで讀みおえた。所の内外から二十名ばかりの参加を得て、隔週の水曜日午後に開催している。
- 中國貴族制社會の研究 班長 川勝義雄・礪波 護
- すでに知られているように、本研究班班長川勝義雄氏は八四年四月四日、逝去された。研究班と

- しては、班員の話し合いの結果、このまま研究會を八六年三月まで續行し、豫定通り研究報告を作成することに決定。班長は礪波護氏がつとめることになった。
- 一九八三年度
- 六月一日 詩話に見える佛教の影響 矢淵 孝良
- 六月一五日 府兵制について 氣賀澤保規
- 六月二九日 九品中正制と孝課 葭森 建介
- 九月二八日 大明土斷について 安田 二郎
- 一〇月一二日 劉宋における將軍號と都督 小尾 孟夫
- 十一月九日 王儉について 狩野 直禎
- 十二月七日 『歷代三寶紀』について 大内 文雄
- 二月一日 宋代の監司と守令 梅原 郁
- 二月一五日 江西藩鎮考 伊藤 宏明
- 一九八四年度
- 四月二五日 秦漢時代の刑期と刑役 富谷 至
- 五月九日 隋の辟召制廢止と令史 長部 悦弘
- 五月二三日 漢代における民間秩序の形成 稻葉 一郎
- 行歷僧傳にみえる中央アジアとインド 班長 乘山 正進
- 『慈恩傳』の會讀を従来どおり隔週の月曜日に續けている。莫賀延磧・伊吾・高昌を森安孝夫 (八三年六月一三日、二七日)、阿耨尼國・屈支から颯秣建國までを濱田正美 (一〇月一七日、三日)、屈霜儺迦國から迦畢試國までを本田實信

(一月一四日、二八日)、濫波國から達麗羅川までを乗山正進 (二月二日、八四年一月九日)、咀叉始羅から設多圖盧國までを山田明爾 (二月三日、二月六日)、波理夜咀羅國から阿踰陀國までを乗山正進 (四月二三日、五月七日)、阿耶穆法國から藍摩國までを杉山正明 (五月二一日) の、それぞれ擔當で検討した。なお、一九八三年九月二日から同年一〇月五日までの二四日間、班員より成る甘肅新疆歴史文物參觀團を結成し、中國社會科學院歴史研究所の招聘を受けて、北京・蘭州・酒泉・敦煌・吐魯番・烏魯木齊を訪問、遺迹・博物館を見學。烏魯木齊にて新疆社會科學院開催の學術講演 (濱田正美・庄垣内正弘・本田實信) をおこない、現地研究者と座談會 (北京・烏魯木齊) を含めた交流をおこなった。

### 漢語方言史における言語層問題

班長 平田 昌司

方言資料、文獻資料を同時にふまえるならば中國大陸の言語史はどのように見えてくるかという問題意識から、音韻を中心に研究發表と討論をすすめている。一九八四年五月から六月には北京大學周祖謨教授に御参加いただき、御指導をおおぐことができた。今期の發表は左記のとおりである。

- 一九八三年度
- 六月一三日 ヤオ語の漢字音 高田 時雄
- 六月二七日 敦煌資料の言語層 松尾 良樹
- 七月一一日 和音の聲調について 木田 章義
- 九月一九日 廣州話次濁音陰調字問題 清水 茂
- 一〇月一七日 吳語幫端母古讀考 平田 昌司
- 一〇月三十一日 詩經方言初探 尾崎雄二郎

一月一四日 金文の諧聲について

淺原 達郎

一月二八日 岡嶋冠山『唐話纂要』に見られる唐音の特徴について

林 武實

一月三十一日 漢魏六朝言語史研究の動向

平田 昌司

二月六日 邵榮芬氏の『切韻研究』を讀んで

森 博達

五月二八日 高昌字音考

高田 時雄

古今韻會舉要所引說文繫傳的性質問題

中前 千里

### 日本部

近代日本の政治運動

班長 古屋 哲夫

この研究班は尊王攘夷運動から昭和初期の社會運動まで、近代日本の諸種の政治運動を比較研究することを目的としている。これらの政治運動が生起する條件には、政治體制の集權化、議會の制度化、政黨政治の進展、種々の社會集團の政治化などの政治構造の變化があるが、こうした變動によつて生成・展開してくる政治運動を比較・検討する觀點として、運動の組織、綱領の作成、財政基盤、組織指導のあり方等をとりあげ、政治運動に共通する特質をさぐり、同時に近代日本の政治そのものの特徴を追求する。

- 一九八三年度
- 六月六日 本山幸彦著『政黨政治の始動』 尾崎ムゲン
- 六月二〇日 超然主義の社會的基盤 小路田泰直

七月四日 一九三九年の反英運動

永井 和

八月二三日 打ち合わせ會

九月一九日 府縣統計にみる明治十年代の演説會 古屋 哲夫

一〇月三日 明治十年代前半宮廷派・元老院グループの政治運動 鈴木 祥二

一〇月二七日 昭和期のキリスト教排撃問題について 須崎 慎一

一〇月三十一日 一九一〇年代の農民運動と地主・權力の對應 齊藤 勇

十一月二四日 阿久津村事件について 古屋 哲夫

十一月二八日 新體制運動について 金上 龍平

十二月二日 一九二九―三〇年のゼネモ― 掛谷 宰平

一月二三日 三重縣の自由民權運動について 西川 洋

二月六日 書評『昭和の政黨』 永井 和

二月二〇日 大正前期の労働者意識と國家觀 鈴木 正幸

一九八四年度

四月二日 打ち合わせ會

四月二三日 政黨史研究の問題點 古屋 哲夫

五月七日 明治初期官僚論 佐々木 克

五月一四日 社會移動に關する歴史的研究の問題點 巴ロータ

國民文化の成立Ⅱ ナシヨナリズムの諸相

班長 飛鳥井雅道

懸案の研究報告書も當該期間の大部分を検討に次ぐ検討で費やしなから、六月に『國民文化の形成』として筑摩書房から刊行の運びとなった。研究班では次なる段階として、明治憲法體制下における内外の政治的状況、宗教・教育政策の再編成、資本主義の發達による社會層の變動や出版ジャーナリズムの成立などさまざまな視點から、20年代ナショナルイズムの勃興と日清戰爭に至るまでの國民文化の展開について論じている。

一九世紀日本の情報と社會變動

班長 吉田 光邦

一九世紀は世界の情報構造に大きな變化が生じた時代である。情報技術の革新、情報の發信者と受信者の知的水準の上昇による交流範圍の擴大、さらには、情報系を支える諸機能の專業化など、多くのトレンドがあげられる。このような變化は地球上の諸文明のありようを不可逆的に變えていった。當研究班は、以上のような認識のもとに、主として日本をフィールドとした社會變動をとらえていく。

なお、毎回のあつまりは、外國人の日本見聞記を紹介することからはじめている。國際環境のなかでの日本、および日本イメージの把握という問題意識が、多岐にわたりとすれば分散が勝ちな研究班の支柱になっているといえよう。

西洋部

一八世紀ヨーロッパの空間認識

班長 樋口 謹一

一八世紀は、それまでの閉じた世界から脱け出

そうとする時代であると同時に、無限の成長に賭ける歴史の時代一九世紀ともまた違った様相をもつ時代である。本研究は、この時代の経験した空間認識の大幅な擴大と變化を、自然的・社會的・シンボリック等のさまざまな側面においてあとづけ、それによってこの時代のエピステーメーを浮彫りにすることを目的とするものである。最初は、一應のパスベクトイヴを得るために、各々の視點から大まかな見取圖を描く作業を行なっている。

一八四八年研究

班長 阪上 孝

一九世紀中葉のヨーロッパ大陸諸國は、工業社會への移行の最終局面を迎えていた。そのなかで、現代に直接つながる諸問題が噴出する。世界資本主義と國民國家形成、ナショナルイズム、議會制と民主主義、都市問題、民衆運動と社會主義などである。この研究は、革命の波が大陸諸國を襲った一八四八年に焦點をあてて、これらの問題を検討しようとするものである。そのさい、當時おこなわれたさまざまな社會調査を手がかりに、民衆の生活と意識の實態に迫ることによって、これらの問題をより具體的に解明することを特に重視している。労働者民衆の存在様式、民衆運動の擔い手であった「職人的労働者」の労働、生活および意識、民衆の家族構成とそのイデオロギー、などの解明に力を注いでいる。現在、最終段階に入って、報告書の執筆を急いでいる。

象徴體系の構造論的研究

班長 山下 正男

本研究の研究対象である象徴體系の中には、(1) 話、神學、形而上學のような言語を使った象徴體系、(2) 實際に演じられている宗教儀禮、エチケツト、民俗行事等の體系、(3) 繪畫、彫刻、建築等に

みられるイコノグラフィックな體系等が含まれる。本研究は以上のようないろいろの象徴體系の構造を明確にしたうえで、そうした象徴體系の起源、形成過程、傳播過程を解明し、あわせてそうした象徴體系の意味、社會的機能をも探ろうとするものである。可能な場合は、象徴體系内の通時的または繼時的な比較研究をおこなう。

公共的價値の研究

班長 上山 春平

本研究班は班長の停年退職によって一九八四年三月をもって完了した。なおその成果は上山春平編『國家と價値』（京大人文研一九八四年三月三日發行、B5判四五―ページ）として公刊された。なお執筆者は下記のとおり。

上山春平 山下正男 阪上 孝  
浅田 彰 坂本賢三 内井惣七

都市の社會II

班長 中村賢二郎

引き続き都市の社會史の研究を續けている。この研究會の意圖するところは、歴史の社會における都市を、固有の全體性をもった構造として把握することである。具體的には、都市の生産機能と切り放すことのできない消費のシステムの解明や、祭りや市に體現される祝祭的空間の役割といった都市の制度的構造にかかわるものから、都市内で排除された人々（マルジノー）の存在様式や、兄弟團などに體現される社會的結合關係のあり方といった都市内の社會層の問題にいたるまで多岐にわたっている。このような視角に立って、時代は中世盛期から近代社會の成立期までを対象としながら、都市社會の歴史の形態を、西歐社會と中國、日本、さらに西アジア社會を比較しつつ考察する。

學報」四十號、四十四號、四十六號、四十九號、五十號、五十二號、五十六號に發表している。現在は「惡の花詩篇」「反逆詩篇」そして最後の「死詩篇」の會讀を行なっており、さしもの長きにわたった本研究もいよいよ完成に近づきつつある。昭和六十年年度には「惡の花」全註釋の刊行を豫定している。

場面行動の通文化比較

班長 谷 泰

社會的行動者の行動は、さまざまな行為上の準則を含む諸文脈の認知としての場面に對處するというかたちで、發せられ、かつ相互交渉の状況において、相互的なインター・プレイの様相を呈する。その觀察されるすべての特異的個人間の特異的交渉であるにせよ、そこには何らかの論理が働いているはずである。本研究班では、具體的事象を明確に把握する概念や方法を模索すべく、社會人類學、民族學、靈長類學、言語學、精神醫學、社會學などの分野の研究者が集まって、報告と討議を重ねて、社會における文化行動を解析することを試みている。

客員部門

日本領事報告の研究

班長 角山 榮

日本は鎖國のため長い間海外の通商經濟に關す

から始めた當研究班は、八三年度にはいり次の二つの方向で内容分析の歩を進めている。一方では、領事報告それ自體について、その制度的形成・展開の過程、領事及び領事制度の形成過程、さらに他の海外通商情報蒐集ルート（農商務省など）等について分析を加え、他方で、領事報告を同時代の資料として用いたアプリケーション・レヴェルでの研究を進めている。後者には、海外からを含め數人のゲスト報告者にも参加していただいた。八四年度も、この二つの方向で研究を進め、最終的なとりまとめ・報告書の刊行を豫定している。

個人研究

東 方 部

- 一九三〇年代の中國文學
- 中國音韻史の研究
- 殷周文物の考古學的研究
- 禪宗文獻の研究
- 中國の詩學
- 中國古代の醫學と思想
- 宋代の官僚制度
- 六朝隋唐精神史
- 隋唐社會史研究
- 竹内 實
- 尾崎雄二郎
- 林 巳奈夫
- 柳田 聖山
- 荒井 健
- 山田 慶兒
- 梅原 郁
- 吉川 忠夫
- 礪波 護

中國建築の様式・技法・空間

田中 淡

モンゴル帝國と中國社會

杉山 正明

中國古代中世の政治と學術

富谷 至

六朝文學研究

矢淵 孝良

中國中世近世の繪畫史

宮脊 法子

東北作家の文學

村田 裕子

紅樓夢研究

井波 陵一

中國大陸南部方言の比較研究

平田 昌司

周代金文の研究

淺原 達郎

インドと中國における論理思想の展開

赤松 明彦

明清學術史の研究

井上 進

日 本 部

- 日本技術史の研究
- 日本近代文化史の研究
- 日本フアンズムの研究
- 廢藩置縣の研究
- 植民地經濟の研究
- 文化史および文明史としての國民國家の形成
- 吉田 光邦
- 飛鳥井雅道
- 古屋 哲夫
- 佐々木 克
- 山本 有造
- 横山 俊夫

Peter Kornicki  
藤井 讓治  
園田 英弘  
鈴木 祥二



日本帝國主義の經濟構造  
日本の近代建築  
日本近代文學の研究

杉本 俊宏  
井上 章一  
久保 由美

西洋部

ボードレールの「脱出」について  
ドイツ宗教改革史  
ルソーの政治思想について  
西洋論理想史

多田道太郎  
中村賢二郎  
樋口 謹一  
山下 正男

社會的相互行為の解讀  
近代社會と家族  
フランス散文詩の研究

阪上 孝  
宇佐美 齊

シュメール行政・經濟文書の研究  
インド世界の儀禮の研究  
ブルーストの草稿研究

前川 和也  
井狩 彌介  
天野 史郎

ヨーロッパ一世紀の論理學と意味論  
社會構造の概念に關する社會哲學的考察

岩熊 幸男  
淺田 彰

西洋中世政治思想史  
民族接觸と異文化の相互作用

甚野 尙志  
細川 弘明

東方部研究會

一九八三年  
一〇月二二日 井波論文「白話小説史に於ける『紅樓夢』の位置」批評

尾崎雄二郎

一〇月二六日 富谷論文「秦漢の勞役刑」批評  
荒井 健

一月九日 桑山論文「インドへの道——玄奘とプラバールカミトラ」批評  
吉川 忠夫

濱田論文「十九世紀ウイグル歴史文獻序説」批評  
赤松 明彦

三浦論文「朱晦庵と易——そのト筮説をめぐって」批評  
柳田 聖山

林論文「殷——春秋前期金文の書式と常用語句の時代的變遷」批評  
森 時彦

小野論文「東林黨考(一)——その形成過程をめぐって」批評  
狹間 直樹

一九八四年  
二月二九日 鋪首・獸環の若干をめぐって  
林 巳奈夫

三月七日 パーミヤーン大佛の年代  
乘山 正進

三月二二日 詩經方言學初探  
尾崎雄二郎

四月二日 語錄の歴史  
柳田 聖山

老子想爾注について  
麥谷 邦夫

夏期講座「異文化接觸の諸相」  
一九八三年八月 於 本館大議會室

事業概況

一日 中世ヨーロッパと地中海世界  
甚野 尙志

二日 土の傳統と木の傳統  
——中國建築の形成——  
田中 淡

儀禮と象徴——古代インドの世界から——  
井狩 彌介

二つのユートピア  
出版文化の可能性  
——貸本屋の機能を中心に——  
小野 和子

シベリアの旅  
コーニッキー・ピーター  
吉田 光邦

開所記念公開講演會  
一九八三年十一月一日 午後一時  
於 本館大議會室

黑船再考——文化的相互誤解の效用——  
於 本館大議會室

國共合作の崩壊と汪精衛  
イェスにおける二つの死  
——受難傳承の構成論理——  
谷 泰

停年退官教授記念講演會  
一九八四年三月一六日 午後三時  
於 本館大議會室

國家について  
一九八三年度漢籍擔當職員講習會  
——漢籍電算處理——  
於 本館大議會室

文部省學術情報圖書館課と本所附屬東洋學文獻センター大型計算機センターとの共催による講習會は、一〇月三日から一〇月七日まで、左の如く行なわれた。

一〇月三日 漢籍の電算化について(講義)  
勝村 哲也

東洋學文獻類目の編集と  
フォーマット(講義)  
都築 澄子・志水喜久子

入力用資料作成(實習)  
計算機入門(講義)  
豊田工業大學教授 北川 一

一〇月四日

一〇月四日

オフライン入力(講義)

図書館情報大學教授

星野 聰

一〇月五日

計算機による漢字処理入力實習

大型計算機センター

島崎 眞昭

一〇月六日

データベースについて(講義)

大型計算機センター

渡邊 豊英

ネットワークについて(講義)

入力實習

一〇月七日

大型計算機センターの役割

大型計算機センター講師

丹羽 義次

## 所員 動 靜

○赤松明彦氏を助手(東方面)に採用

○細川弘明氏を助手(西洋部)に採用(以上一九八三年七月一〇日付)

○小野和子講師(東方面)は助教授に昇任(一九八四年八月一日付)

○濱田正美助手(東方面)は、辭任の上、法政大學經濟學部助教授に轉出

○森 時彦助手(東方面)は、辭任の上、愛知大學法經學部助教授に轉出(以上一九八四年三月三十一日付)

○上山春平教授(西洋部)は、停年退官

○吉田光邦教授(日本部)は、當研究所所長、附屬東洋學文獻センター長に兼任。

○富永茂樹氏(長崎大學教養部講師)を當研究所助教授(西洋部)に配置換

○小南一郎文學部助教授は當研究所助教授(東方面)に配置換

○吉川忠夫助教授(東方面)は教授に昇任(以上一九八四年四月一日付)

○竹内 實教授(東方面)は、一九八三年五月二八日伊丹發、西安市周邊、洛陽市周邊等で文化財遺跡の視察並びに上海市範學院、社會科學院文學研究所等で資料収集を終え同年六月五日歸國

○岩熊幸男助手(西洋部)は、一九八三年六月一三日伊丹發、オックスフォード大學で第六回中世論理學ヨーロッパシンポジウムに出席、ナイメーヘン大學、パリ國立圖書館等で中世論理學の研究、資料収集を終え、同年九月六日歸國。

○前川和也助教授(西洋部)は、一九八三年七月二日伊丹發、ライデン大學アジア學研究所で第三〇回國際アッシリア學會に出席、ケンブリッジ大學東洋學研究所で第二回シヌメール農業研究グループ集會で報告し、同月二六日歸國

○谷 泰教授(西洋部)は、一九八三年八月一日伊丹發、カナダのケベックに於いて國際人類學民族學會(フーズII)に出席、ブリテッシュコロンビア大學で同學會(フーズII)に出席し、同月二八日歸國。

○宇佐美 齊助教授(西洋部)は、一九八三年八月一日伊丹發、スリジ・ラ・サル文化研究センターで、「イヴ・ボヌフォワ」研究集會に参加し、パリ大學等でポードレル研究のための調査、資料収集を終え、九月二七日歸國。

○小野和子助教授(東方面)は、一九八三年八月二日伊丹發、中國社會科學院近代史研究所、北京大學、西北大學、厦門大學等で東林黨及び原始社會に關する資料収集を終え、九月二五日歸國。

○村田裕子助手(東方面)は、一九八三年九月五日伊丹發、沈陽遼寧大學で東北作家研究に關する資料収集を終え、一九八四年六月三〇日歸國。

○宮寄法子助手(東方面)は、一九八三年九月五日伊丹發、北京故宮博物院、中央美術院等で中國繪畫史研究、繪畫の直接調査を終え、一九八四年二月二九日歸國。

○桑山正進助教授、濱田正美助手、杉山正明助手(東方面)は、中國社會科學院歷史研究所の招聘により一九八三年九月二日伊丹發、蘭州・酒泉・敦煌・トルファン・ウルムチ等で甘肅・新疆歴史文物を參觀、各地の社會科學院、博物館で交流を行い、一〇月五日歸國。

○勝村哲也助教授(東方面)は、一九八三年一〇月一〇日伊丹發、中國社會科學院で中國中文信息研究會に出席し、同月一四日歸國。

○淺田彰助手(西洋部)は、一九八三年一〇月二一日成田發、コロンビア大學で「經濟學と記號論」セミナーに参加し、同月三十一日歸國。

○山田慶兒教授(東方面)は、一九八三年一〇月二八日伊丹發、西安に於いて中國科學技術史學會で講演、上海に於いて徐光啓三五〇年記念學術討論會で講演、學術交流を終え、十一月一日歸國。

○谷 泰教授(西洋部)は、一九八三年二月二〇日ローマ大學、チエルフエト、クレダロ村周

邊等で對面的相互交渉に關する研究及び資料收集を終え、一九八四年一月九日歸國。

○濱田正美助手(東方部)は、一九八三年二月二日伊丹發、パリ第三大學トルコ學研究所、社會科學高等研究所等で共同研究の打ち合せ、並びに資料收集を終え、一九八四年一月三日歸國。

○吉川忠夫助教(東方部)は、一九八四年二月二日伊丹發、中國社會科學院、四川大學等で中國佛教、道教史の研究及び遺跡に關する資料收集を終え、同年五月三〇日歸國。

○前川和也助教(西洋部)は、一九八四年三月一六日成田發、大英博物館、イスタンブール考古博物館所藏シユメール行政・經濟文書の研究を行い、一九八五年三月十五日歸國豫定。

○梅原 郁教授、富谷至助手(東方部)は、一九八四年三月二日伊丹發、河南師範大學、杭州大學等で中國學者との學術交流及び南宋史迹見學を終え、四月六日歸國。

○小野和子助教(東方部)は、一九八四年三月二五日伊丹發、上海社會科學院、浙江省社會科學院等で、東林黨に關する資料收集を終え、四月八日歸國。

○Peter F. Kornicki 助教(日本部)は、一九八四年三月一四日伊丹發、ラトガース大學アジア研究會議で研究發表を行い、ロンドン大學、ワルシャワ大學で資料調査及び研究資料收集を終え、五月六日歸國。

○竹内 實教授(東方部)は、一九八四年三月一日伊丹發、パリ第七大學で現代中國及び現代中國文學の講義を行い、ロンドン大學で意見交換、

資料收集を終え、五月一八日歸國。

○狹間直樹助教(東方部)は、一九八四年四月一八日伊丹發、北京大學、廣東省社會科學院、貴陽師範學院、雲南省社會科學院等で國民革命の研究及び資料收集を終え、八月一日歸國。

○吉田光邦教授(日本部)は、一九八四年四月二七日成田發、ニューヨークのコーニンググラス・センター、ジャパン・ソサエティで講演、カリフォルニア大學等で資料收集を終え、五月八日歸國。

○多田道太郎教授(西洋部)は、一九八四年四月二七日伊丹發、上海博物館、西南民俗學院、龍門等で中國西南地區民俗學調査及び資料收集を終え、五月一日歸國。

○官崎法子助手(東方部)は、一九八四年五月九日伊丹發、北京の中央美術院、成都周邊等で中國美術作品調査及び資料收集を行い、黄山派討論會に参加、八月八日歸國。

### 出版物

#### 紀要

- 東方學報 第五六號(紀要第九六號) 一九八四年三月一五日刊
- 人文學報 第五五號(紀要第九三號) 一九八三年九月一六日刊
- 人文學報 第五六號(紀要第九四號) 一九八四年三月一五日刊
- ZINBYAN(歐文紀要)第一九號 一九八四年二月三〇日刊

#### 研究報告その他

- 東洋學文獻類目 一九八一年度 附屬東洋學文獻センター編
- 一九八四年二月二〇日刊
- 李義山文索引 荒井 健編
- 一九八四年二月二〇日刊
- 祖堂集索引 下冊 柳田聖山編
- 一九八四年二月二九日刊
- 中國近世の都市と文化 梅原 郁編
- 一九八四年三月一七日刊
- 國家と價值 上山春平編
- 一九八四年三月三一日刊
- 都市の社會史 中村賢二郎編
- 一九八三年一月三〇日(ミネルヴァ書房)刊
- 外國人研究員(比較社會客員部門) Alessandro Valota
- ヒサ大學助教 農村社會の變容を中心とする日、伊社會構造の比較研究 受入教官 古屋 教授
- 期間 一九八三年九月〜一九八四年五月
- 本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究所において共同研究に参加する外國人學者は次のとおりである。
- Rembrandt F. Wolpert
- 連合王國 ケンブリッジ大學研究員
- 中國貴族制社會の研究に参加及び唐代の音樂の研究 受入教官 礪波 護
- 期間 一九八四年四月〜一九八五年三月
- 外國人特別招聘教授(客員教授)
- 載 逸 中國人民大學清史研究所副所長
- 中國近代化の研究 受入教官 狹間助教

期間 一九八三年九月〜一九八三年一月  
外國人招聘學者(招へい教授)

郭湖生 南京工學院建築研究所  
中國・日本古代建築の比較研究

期間 一九八三年七月〜一九八四年二月  
受入教官 山田 教授

○本學研究員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。

Ronald W. Hadley ミシガン大學院生

正法眼藏の研究 指導教官 柳田教授

期間 一九八三年六月〜同年十二月

吳豐邦 臺灣

孫文の革命運動と日本 指導教官 竹内教授

期間 一九八三年九月〜一九八五年九月

Stephen J. Roddy プリンストン大學院生

儒林外史を主とした明清小説

指導教官 竹内教授

期間 一九八三年九月〜一九八四年八月

錢立方 ハーバート大學院生

中國六朝史 指導教官 吉川助教授

期間 一九八三年一〇月〜一九八五年六月

James V. Stokes ケンブリッジ大學院生

馬祖道一と洪州宗派 指導教官 柳田教授

期間 一九八三年一月〜一九八五年一〇月

Mesnil Evelyne パリ第七大學院生

益州名畫錄の研究 指導教官 荒井教授

期間 一九八三年一〇月〜一九八五年九月

Detlef Kohn ゲッティンゲン大學院生

中國の傳統な醫學 指導教官 山田教授

期間 一九八四年五月〜一九八五年四月

藪内 清・平岡武夫兩名教授は一九八三年二月二日付けをもって日本學士院の新會員に選出された。

川勝義雄教授(六一歳)は、かねて病氣療養中の

ところ、一九八四年四月四日逝去され、五月二

〇日當研究所(本館)にて追悼式が行われた。

同教授には四月四日付けにて従四位に敘せられ、

勳三等瑞寶章が授與された。

招聘外國人學者 方 紀生氏(七四歳)は、一九

八三年六月八日逝去された。